
15夜(ハヤブサ、アヤネ)

枯葉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

15夜（ハヤブサ、アヤネ）

【Nコード】

N1477B

【作者名】

枯葉

【あらすじ】

このブローチ、実は霞&隼&疾風が選んだものです（想像）隼の店で選んで、リボンは霞がかけてあげました。綾音のお気に入りのお物にあつたのでネタとして使いました。菖蒲からの贈り物でも面白いですけど、こっちの方が話になるので（汗）

その日、綾音^{あやね}は誕生日だった。

だが一忍に過ぎない彼女に、次期党首疾風やその妹霞のような盛大な宴の場が設けられる事は無かったが、

毎年、父幻羅^{けんら}が親子二人だけのささやかな会を開いて祝ってくれるのを

嬉しく思っていた。

そして更に嬉しいのは贈り物だった。

贈り物は父幻羅からの物と、そして表向きは幻羅からとなっていたが綾音の本当の母である菖蒲^{あやめ}からの物があった。

（その事は、綾音は知らない。）

会が終わった後、父はゆっくり休めと言ってくれたが、綾音はそれをやんわりと断って一人修業に励んでいた。

場所は、人目につかない竹林の中。

月の光に照らされて、まるで昼のように明るい。しばらくして。

「ここにいたのか」

不意に背後から声がして、

油断したと思いつさに構えたが、相手が誰か気付いて軽く会釈をする。

「何用ですか？」

「他人の修業を見るのも、修業の内だからな。」

一歩、二歩。

綾音は男に近づいた。

月明かりにはつきり照らし出される、一つに束ねた茶色い長い髪、緑の瞳、

端正な顔：そして逞しい体を包む黒い忍装束。

間違はなく、隼龍だ。ハヤブサ・リユウ

隼流忍術の超一流の使い手で、最強と謳われる男。次期党首疾風様の親友。

綾音は心の中で自嘲する。

背後を余裕でとられた。

私はこの人に敵わない。まだ、敵わない。

「私などの修業姿が、最強の忍と謳われる貴方の役に立つとは思えません。」

「そんな事は、私の知らぬ間に人が勝手に言ったものだ」

隼は他人事のように涼しい顔で言つてのける。恐らく本当に他人事なのだろう。

「それより、本当の目的は何です？」

考えたが、思いつかなかった。

この男と顔を合わせた事は何度となくあるし、彼の伝令役を務めた事もある。

けれど、それだけだ。

だが任務を依頼しに来たとしては雰囲気や和やか過ぎた。

「鋭いな」

隼はふっと目を細めて自分を見つめた。

綾音はこの男にこう言う目で見られるのが嫌いだった。

霞に向ける眼差しとまるつきり同じだ。

そう、疾風様が霞に向けるような。

霞、疾風、隼。

彼ら3人の仲の良さは周知の事実だった。

「どう考えても、不自然ですから」

この男は穏やかで、自分のような影の存在にも気をかける（甘い男だ）し、

押し付けるような物言いもしない。

それが自分を落ち着かなくさせる。

騙されない、何よ、本当は心の中で霞と比べて蔑んでいる癖に！

「そうか？お前に会うのが目的だったんだが」

「え？」

綾音は目を開いた。

「どうして…」

霞ではなく、私に？

「邪魔をした」

隼はあつと言う間にその場からいなくなった。

「相変わらず、変わった人ね」

ぼつりと呟いてふと地面を見ると、

彼が立っていた場所に綺麗にリボンがかけられた包みがあった。

拾って開くと、古い感じはするが上品な細工^{アゲハチヨウ}のブローチが入っていた。

あの人は、そう言えば表の世界でアンティークショップを経営しているのだったか。

綾音はしばらく、その場でぼんやりと立ち尽くしていた。

心の中に、温かいものが残ったのを感じながら。

（後書き）

疾風&霞&綾音が異父兄妹だと言う事を隼は多分知っていると
思います。

（知ったのは結構最近っばいけれど。）

隼も立場があるから霞に対しては堂々と気をかけられるけれど
綾音に対してはそうもいかないのですが、でも綾音に対しても、
隼は霞と同じように可愛がりたいと思っていますのではないかと。
気にしてないと言う事は絶対無いと思います。

特に彼女の孤独感や闇を知っているから余計に気になるのではない
かと。

隼は綾音に対して疾風や霞が兄や姉としての愛情を注いでやれない
のを分かってるので

上手く代行してやりたいと思ってるのです（想像）

綾音はと言うと、隼をつかみ所の無い不思議な人だと思ってると思
います（想像）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1477b/>

15夜(ハヤブサ、アヤネ)

2010年10月12日05時23分発行